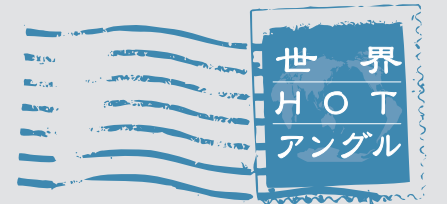


from Sierra Leone



シエラレオネの ちょっといい話



貧困国が集中する西アフリカのシエラレオネ。長い内戦が2002年によやく終結し、人々が安心して暮らせる国づくりが進む中、日本も支援を再開した。現地でも出会った「ちょっといい話」を3つ紹介する。



15年前に贈った日本の井戸

シエラレオネ環境省で水分野の支援に携わる私に、ある日、分野別ドナー会合でよく顔を合わせる英国援助庁(DED)の女性職員からメールが届いた。メールには、「ハイ、アキオ! この写真、気に入ると思うよ」と書かれ一枚の写真が添えられてい



かつて日本の支援で建てられた井戸の周りに集まる村人たち。彼らが自主的に管理し、現在も使用されている

た。写っていたのは、井戸の周りに集まった女性や子どもたちの明るい笑顔だった。

彼女によると、シエラレオネ北部で井戸の調査を行ったとき、近隣の村に古い井戸があったという。村人たちに話を聞くと、「15年以上も前に日本が作ってくれた井戸だよ。今もちゃんと動いている。時々調子が悪くなるが、みんなでお金を集めて近くの町から修理屋を呼んで直してもらい、使い続けている」そうだ。その後もう一度写真を見た私は、みんなの表情が心なしか得意げに思えた。

日本が支援したその井戸は「深井戸」で、安全な水を継続して供給できるものの、掘削に機材が必要なためにコストがかかる。一方、手掘りが可能な分費用が少なくて済む「浅井戸」は、数年で水質が悪くなったり、水が出なくなったりすることが多い。国際協力の仕事をしていて一番うれいしいのは、以前に支援したものが、ずっと大事にされ、使い続けられて



ロクプール水処理施設を管理するカマラさん(左)

町唯一の水道を守り続けるカマラさん

北西部のカンビア県は、安全な水へのアクセスが全国で最も難しい。日本や欧州の協力で作られた上水道用水処理施設のほとんどは、11年間続いた内戦で破壊された。しかし、日本の無償資金協力で20年前にロク

プールという町に建設された施設では、水源から水をくみ上げるポンプだけが奇跡的に生き残った。当時、プロジェクトのカウンターパートの一人だったカマラさんは、ずっとこの施設の保守管理を行ってきた。水をろ過・消毒する機能は失われたが、内戦が終わると町の人々から少しずつお金を集めて、1日に1〜2時間ほど発電機を作動させ、水を供給し続けてきた。この水がなければ、人々は歩いて遠くまで行き、水をくみしなければならぬ。彼はこの仕事に誇りを持っている。数カ月一度、首都フリータウンに

やってきて、私たちのオフィスに顔を出す。「発電機のオイルがなくなつた」「バッテリーが使えなくなつた」と時々支援を求め、できることは皆個人的にサポートしている。

こうした状況を受け、現在JICAは、ロクプールの上水道用水処理施設の改修と保守管理、料金回収システム構築の技術協力プロジェクトを計画している。また、町の水処理施設だけではなく、カンビア県内の村々の水源となる深井戸の整備(内戦前に実施した深井戸の改修も含む)にも協力していく予定だ。

現地の人々の目線に立って

今年3月からカンビア県でJICAの「農業強化支援プロジェクト」が始まっている。シエラレオネは農業が盛んな国だが、厳しい自然環境のため生産性が低く、長く続いた内戦の影響で生産量が低下、人々の暮らしも苦しい状況が続いている。プロジェクトでは、カンビア県内のいくつかの地区で基礎調査を行い、それぞれの条件に応じた農業技術を普及する仕組みを作り、食料増産に貢献することを目標としている。プロジェクトの専門家に、北海道



農民の依頼で、低湿地に繁殖した雑草(アフリカイネ)の野生種を調査する山口専門家(右)(撮影:君島崇専門家)

大学教授を退官された山口淳一さんがいる。山口さんはフットワークが軽く、田んぼの中もはだして入って行き、熱心に指導する。カウンターパートである農業省の職員も地元の人たちも、援助関係者が自分たちの話を聞き、対等に議論し、農民の目線で指導をしてもらった経験がないようで、山口さんを尊敬している。というのも、これまでの援助のほとんどは、黙っていてもドナーからお金やモノがもらえる場合が多く、地元住民の主体性が欠けていた。また、情報収集のための調査やワークショップが行われても、その結果は住民たちに伝えられていなかった。



普及員とともに基礎調査のデータチェックを行っている山口専門家(中央)(撮影:君島崇専門家)

JICAのプロジェクトでは普及員や農民の主体性を尊重し、日本人専門家が彼らとともにフィールドに出て、彼らの知識と経験に学ぶと同時に、自分の目で確認しながら意見交換を行っている。また、調査結果は必ず報告し、情報の流れが一方通行にならないよう、配慮している。このような援助のスタイルは、彼らには驚きだったようで、とても感謝される。日本の井戸が長年使い続けられているのも、こうした日本人の熱意が相手に伝わっているからではないか、と思うところである。

「世界HOTアングル」では、世界各地でJICA事業に携わる皆さんからの投稿を募集しています。ご応募・お問い合わせは、jicagap-opinion@jica.go.jp まで。